

経済学部教養演習を行ってみて

経済学部 菅原陽心

My Experience to Teach a New Subject “Introduction to Research Methodology”

Youshin SUGAHARA (Faculty of Economics)

A recent addition to Niigata's Faculty of Economics has been the course titled “Introduction to Research Methodology.” Previously, methodology courses were not taken until the third or fourth year; however, the new curriculum makes it possible for students in their second year to take such a course. So we have the new subject for the preparation to participate in the course.

At first, I required my class to summarize a part of some books. All my class (19 members) reported their summaries during the first two weeks of the course. Naturally I had little time to comment each of them. So I divided students five groups and from the third week the group reported summaries. After all the groups reported, I required them to select some topic and report it. I hoped students learn the way to summarize, report and debate. I think that my class learned the way to summarize to a certain degree but could little learn how to report and debate. I suppose the reason why we couldn't have sufficient fruit is that only a few students showed positive attitude though many have interest in various economic or social problems. I think we need bring students to take a positive attitude to study.

Key words: Introduction to research methodology, Summarizing, Reporting, Debate, Positive student attitude

1) 教養演習設置の経緯とねらい

経済学部では、平成7年度から経済学部改組に伴う新たなカリキュラムを実施している。特色はいろいろあるが、大きな変更の一つは、演習が3、4年次に履修する必修科目であったものを、標準履修年次を2、3年次に繰り上げると同時に、必修科目から選択科目に変更したことである。この変更のねらいは演習の空洞化が生じかねないという問題を解消することにある。すなわち、必修科目から選択科目へと変更したのは、演習が必修科目であると、学生はともかく何らかの演習に所属しなければならず、希望のゼミに所属できない学生や必ずしもゼミの目的を理解して演習に参加しているわけではない学生がでることになり、そのため、活発な演習活動が難しくなる、また、あまり熱心に演習に参加しない学生にも、必修科目であることから、

単位を認めないわけにはいなくなるという問題を解決するためである。また、標準履修年次を繰り上げたのは、4年次生は就職活動のために前期に演習に欠席しがちになり、十分な演習指導が行えないという教員からの不満の声に対応したものである。4年次生の指導に関して一言しておけば、この改革と同時に卒業論文（選択で8単位）を設けることにより、4年次生には卒業論文指導という形で、その勉強の形態にあった実質的な指導を行うということが決められた。

こうしたねらいを持つ変更であるが、しかし、その反面、1)必修科目から選択科目にすることによって、演習を履修する学生が減少するのではないか、2)経済、経営の問題を少人数形式で、深く追求するという演習に2年次生はうまくついていけないのか、という問題が提起された。本稿には直接関わりがないが、1)について一言しておく、後期開始早々に来年度の演習のガ

イダンス、配属手続きを開始し、昨年末には演習配属はすべて決定したのであるが、1年次生で来年度の演習を希望しなかったものは10名程度であり、ほぼ全員が何らかの演習を選択した結果になっている。これは、演習が大学教育の大きな特色であるということを入学期のガイダンスで強調し、そのような理解が十分得られたこと、また、経済学部で少人数形式のものがほとんどないことから演習がきめの細かなネットワークを形成したいという学生の欲求を満たす場として位置づけられていることによると考えられる。なお、この配属に関しては、学生の希望と担当教官の何らかの選考に基づいて行なったので、少なくとも演習参加時で、目的不明で演習に参加するというような学生はいないと予想される。

さて、本稿に関わるのであるが、2)の問題に対応するものとして、教養演習の設置が検討された。ただ、本論に移る前に、次の点だけは指摘しておきたい。すなわち、経済学部では、教養課程改革に関連したカリキュラム改革によって、経済学部の1年次生に平成5年度から専門基礎科目として、経済、経営関係の7つの科目を開設した。これは、経済学部の学生に、1年次から基礎とはいえ、専門科目を提供することによって、経済、経営を勉強する熱意を鼓舞し、また、2年次からの専門的な学習が円滑に行えることをねらいとしたものであった。こうした改革を実施したことによって、2年次からの演習開設に関しても、一定の条件が整備されたとも考えられ、演習を2年次から履修させるということについて、現実的に取り組めるようになったといえよう。しかし、もちろん、それだけでは十分とは考えられないことから、教養演習の実施が決められた。

要するに、教養演習のねらいは、少人数で行われ、各自の発表や発言が授業の重要なポイントとなる演習に2年次からスムーズに参加してもらうための準備にあるということになる。具体的には、発表の仕方、発表に際して配布するレポートないしレジメの作り方、学生同士での議論の仕方を教えることが、もう少し実情に即していえば、論文の読み方、文章の作成の仕方、積極的に発言する態度を身につけさせることがねらいだということになる。どのような素材でどのようなや

り方で行うのかということは実施する各教員に委ね、こうした教養演習という科目の性格を担当の各教員に確認したうえで、教養演習は平成7年度後期から実施された。

2) 教養演習を実施してみても

筆者は教養演習を、大きく二つの部分に分けて計画を立てた。前半は文章を読ませて、要約を書かせ、それを発表させるというものであり、後半は、何らかのテーマで学生に発表させるというものである。いわば、前半で、論文の読み方、要約の仕方を学ばせ、後半では、さらに、具体的な演習の形式を学ばせて、出来れば、議論の仕方、より具体的にいえば、積極的に発言する態度を身につけてもらいたいということをねらったのである。

最初の課題は日高普『社会科学入門』(有斐閣新書)のIIの1の箇所(24頁)の大意を200字程度にまとめさせるという、ややきつい内容であった。あらかじめ、テキストを渡しておき、演習の前日までに要約文を提出させ、演習では、全員の要約を印刷、配布した上で、各自に読んでもらい、批評するという形式をとった。同様の形式で中西準子『水の環境戦略』(岩波新書)の序文(12頁)の要約を全員から提出させ、批評を加えた。この2回の演習では基本的な要約の仕方についての考え方はある程度伝わったと思われるが、ゼミ生19名全員の要約文を発表させることから、とても時間が足りず、一人一人の要約にそくした具体的な問題提示や議論を行うということはできなかった。そこで、3回目からは、全員を5つの班に分け、要約の提出義務は担当の班に限定するというようにした。ただし、全員が課題の文章を読んでくるということは通常の演習と同様に義務づけたわけである。そして、各班の発表が一巡するまで、要約の発表という形で演習を行った。

このように意図した前半であったので、当然そこで、議論の場を作り出すということは十分ではなかった。が、例えば、南北問題を論じた文書を取りあげたときは、筆者がこの説には納得し難い点があるといったところ、それは何か、という疑問がゼミ生から出され、それをきっかけに結構活発な議論が交わされたことが

あった。全体を通して、議論の場を作るということはきわめて難しかったのであるが、こうしたことから、学生も何らかのきっかけと、問題に対する興味、論説に対する共鳴などがあった場合、稚拙ながらも様々な議論が展開できるという点は明記しておくべきであろう。

このような演習を行った後、機械的に分けた班ではあるが、各班が主体となって、何を素材にしても良いし、どのような仕方でもよいから、発表するというやり方で演習を進めた。

教養演習を行ってみて、学生たちの横のつながりがきわめて薄いということが感じられていたので、こうしたいわば突き放したやり方で、果たして学生が発表を行えるかどうか、不安感は否めなかった。しかし、要約を班単位でやらせたということもあって、各班とも、それなりに課題についての相談を行い、さまざまな内容ではあるが、なんとか発表にこぎ着けた。ただ、例えば、最初の班の発表では、それ以前のやり方そのまま、つまり、何を読むかということについては、担当の学生たちが相談し用意をしたのであるが、発表は、全員がそれぞれその文章の要約を作り、発表の時に各自自分の要約を読み上げるというものであった。発表のやり方を教えなかったという反省はあるが、そこまでやらなければならないのかということが意外に感じられると同時に、教養演習を行うについての筆者自身の基本的な心構えに欠落していたところがあったことに気づかされた。すなわち、学生は非常に素直であって、一つの方法を指導すると、他の指示をするまで、そのやり方を踏襲すると思っていた方がよいということであり、また、きわめて初歩的であると思われたとしても、発表の手順、役割分担などについても具体的に、丁寧に説明することから始めなければならないということである。

この発表の後、同じ要約を繰り返し読み上げるのではなく、それぞれ分担を決め、出来れば何らかの問題提起をするような発表にしてほしいと強調した。ただ、それ以降の発表も、学生の準備する時間、相談する時間が多くとれなかったということが大きな理由であると思われるが、要約中心の発表が多かったのは残念であった。それでも、再三のこちらの示唆を受けて、最後の方の発表では、素材としている文章をただ要約す

るのではなく、それを批判する意見を述べるものも見られたことは記しておかなければならない。批判的に読むというのは、なかなか難しく、1年次生ではほとんど初めての体験といってよいかもしれず、内在的な観点から、あるいは、論点を深く掘り下げて説得的な反論を展開するというものではないが、そうした見方をとろうとしたという点では、大きな進歩であると思われる。演習では、どのような意見でも、なるべくその含意をくみ取るという方向で積極的な肯定的・批判的議論として、展開させていくような努力をしたつもりであるが、この点については、筆者の力のなさを感じるばかりである。

こうした教養演習を体験し、あらためて感じたことは、良くも悪しくも、学生の素直さである。つまり、先ず、筆者が用意した課題に必ずしも関心があるとは思えない学生もともかくも、要約を作成する、発表するということは何とかやり遂げたという点、第二に課題に関する感想はだいたい論者の主張に肯定的なものが多かったという点、第三にこちらからの指示がなければそれまでのやり方を機械的に反復するという点である。いろいろな意見を聞くと、学生は様々な問題関心を持っているということも十分感じられ、意見の発表の仕方などを早い段階で具体的に丁寧に指導すれば、あるいは、その後の演習で熱の入った議論の場を持つようになるという期待も抱かせられた。ただ、そのようなことが実現可能となるためには、学生の積極性を引き出す必要があるわけであり、自分の頭で批判的に考えるという習慣を身につけてもらうということが今後の重要な課題になると思われる。

最後に、きわめて些末な問題であるが、学生が自分で用意する課題やレジュメの印刷は、学生たちに任せ、学生用の印刷機材で印刷させた。教養演習の時間前に印刷しようという学生の態度にも問題があるが、この印刷機が調子が悪いとか、また、多くの学生が利用しようとしていて、使えない場合があるという問題があった。その結果、演習の時間が短くなってしまったということも何度かあったが、人法経それぞれで教養演習科目を設けるなど、演習科目が増大していることから、こうしたことにも十分配慮しなければならないと思われる。